

「いい子」誰しも一度は、聞いたことがある言葉だろう。あるいは親などから実際に言われたことがあるのではないか。いい子であることが犯罪者に繋がるなんて想像したことがあるだろうか。自分はこの特徴的なタイトルに興味を持った。

本書は著者が刑務所や少年院で体験したことを踏まえて書いた物である。タイトルの通り、「いい子に育てる」ことの裏に潜む危うさを浮き彫りにし、幼少期の家庭環境の問題などを注視し問いただす内容となっている。

本書では、犯罪者の大多数は幼少期に「いい子」として無理に演じないといけなかった状況を経験している。親の期待に応えるために、いい子になろうとすると自分の感情を抑え込んだり、自己主張を封じたりするが、内面では強いストレスや怒りをため込んでいる。その抑圧が限界を迎えると突然、非行に走ったり不登校になったり挙句の果てには犯罪を犯してしまう可能性がある。つまりいい子であることは社会的には称賛されるが、反面心理的に危うい存在にもなり得ると描いている。

また興味深いのは、少年院の教育について、形が整っていることを評価していて、少年が自発的に自分の問題をみつめる場ではないという点である。著者は、施設の教育や懲罰では、少年に対し感情統制力を身に付けさせるどころではなく、かえってますます我慢して抑圧させていく危険性があり、少年が本当に感情を統制するには、心の奥底にある鬱積した感情を吐き出すことから始めないといけないと述べている。こうした教育では更生するどころか、ますますストレスや怒りをため込み再犯に繋がるのではないかと感じざるを得ない。

本書を読んで、自分は、いい子と犯罪者は対局的な存在だと考えていた。しかしこの本を読んだからは対局的な存在ではなくむしろ案外身近な存在なのかもしれないと考えるようになった。いい子になることは決して悪いことではないが適度に自分の意見を主張し心のバランスを保てるようするのがよいのではないだろうか。

審査委員による講評

法学部准教授 甲斐 朋香

「犯罪者」の多くが幼少期から「生きづらさ」を抱えており、だから、犯罪防止のためにも、厳罰一辺倒ではなく「立ち直り」や「社会包摂」に力点を置くべきだ—という考え方が、一定程度ではあるものの理解を得られるようになりつつあります。そうした社会の変化の中で、本書の主張をどのように位置づけるか、といった部分にまで視野を拡げて論じてもらえたら、更に奥深い書評となったように思います。